レレレノレ

COTOKITI JP

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アラサーに突入したオッサンオリ主と戦艦レ級がイチャイチャラブラブドロドロしながら戦乱の世を生きていくラブコメディです（大嘘）

目次

あの夏の思い出 ―― 1
夏はまたやってくる ―― 3
残された者と捨てられた物 ―― 6
歪んだ愛の逃避行 ―― 11
新天地 ―― 16
プリンセス・オブ・ジャンク ―― 21
深海の都 ―― 26
キックスタート ―― 30

あの夏の思い出

俺が、あいつと出会ったのはもう２０年も前のガキの頃の話だ。
その時の俺は例えその相手が人の言葉を話さなくとも、青い血が流れていようともあくまで同年代の少女として接した。
今思えば、あの時の俺の行動は軽率過ぎたのかもしれない。
『お前、名前なんてーの？どっから来たの？外人？』
『キィ？』
『キーじゃわかんねーよ』
初めの出会いは小学校最後の夏休みがちょうど始まった頃だった。
真夏の日差しが照りつける中、真っ黒な服にフードを被った少女はこの田舎ではなかなかに目立っていた。
ここは千葉県の館山市、そこでも更に西の方にある小さな町（というか村）だ。
昔はもっと人がいたそうだが、少子高齢化やら若者の上京やらのお陰でここの人口もすっかり減ってしまい、今じゃここに住んでるのは僅かな子供とそれ以外は皆老人だった。
話を戻すが、その少女は車の通る事が殆ど無い車道のド真ん中を堂々と歩きながら周りの木やら草花やらを興味深そうに見ていた。
暑いので海で泳ごうと自転車で海岸まで向かっていた俺は一度自転車を止めると、こちらを興味深く見つめている少女に声を掛けた。
『おーい、んなとこいたら危ねーぞ！』
これが、彼女と俺の関係の始まりだった。
あの妙に青白い肌と髪は忘れられない。
同年代の友達もいなかった俺はあの時のほんの数十日の関係を楽しんでいた。
彼女も、最初は俺の言ってることややってることの意味が分からなかったのか妙な鳴き声を上げながら首を傾げるばかりだったが俺のただ熱心なだけの指導で言葉を覚え、人の生活についての知識を身に付けてからは笑顔になる事が多かった。
森の中に作った秘密基地に招き入れ、一緒にゲームをしたり。

海に連れて行って一緒に泳いだり。（彼女がやたら泳ぎが上手いのには驚かされた）

あの夏休みはきっと、人生で最も充実していた。（因みに異性との関わりがバレるのを少年なりに恥ずかしがっていた俺は両親やその他の知り合いには彼女を見つからないように隠していた）

結局彼女は、人間なのか宇宙人なのか。

それとも……深海棲艦と関係があるのだろうか。

この疑問が解決する事も無く、俺が小学校を卒業する頃には彼女はいなくなっていた。

そして……深海棲艦による人類への一斉攻撃が始まったのも、その日から間も無くだった。

しかし深海棲艦の攻撃から数十年経った今、偶然か神のいたずらか俺は彼女と再び再開することとなった。

堤防に青い血液に塗れて倒れているその少女は、見間違う筈も無い。

間違い無く、２０年前に会った少女だった。

夏はまたやってくる

雨の日の堤防。
仕事から車で帰宅していた時、俺は血塗れ（？）の少女を見つけた。
車を路肩に止め、急いで駆け寄る。
「おい！あんた大丈夫か⁉」
外傷は思ったよりも少なかったが、梅雨の時期のこの大雨の中では凍えてしまう。
凍死する可能性も考慮して、彼女を抱き上げ車の後部座席に寝かせた。
彼女は意識が無いだけでまだ息はしている。
しかし外傷と低体温症のせいでだいぶ衰弱しているようだ。
病院は遠いのでここはまず、一番近い自分の家に連れて行くことにした。
「まさか…本当にアイツなのか……？」
時折「ギィ……」と聞き覚えのある呻き声を上げる少女を横目に車を走らせる。
我が家であるボロアパートに着くなり自分の部屋に少女を抱えたまま駆け込みソファに寝かせると押し入れからヒーターを引っ張り出し、ヒーターで体を直接温めながらエアコンも暖房に切り替えた。
少女の命がかかってるんだ。
多少の暑さぐらい我慢するしかない。
そう思いながらふと少女の服を見る。
２０年前とまるで変わらない、真っ黒なパーカー。
濡れたままの服を着せるのは不味いかと、服を脱がせる事にした。
頼むから今目を覚まさないでくれよ。
無茶な願い事をしながら少女のパーカーに手をかける。
とは言っても彼女の服装はパーカー一枚にその下は下着しか無かったのでパーカーを脱がすだけで済んだ。（こんな服装の時点で色々と問題ありな気がするが）
「ふぅ……」

パーカーを洗濯機に投げ込み、少女の様子をもう一度確かめる。
部屋が灼熱の如き暑さになったので流石にヒーターはしまったが、それでも夏の始まりの時期に暖房をつけるのは辛いものがあった。
それと服を脱がした後に体に付着した血（？）を拭き取った際に気付いた事があった。
「傷が全部治って……いや、消えたのかこれは？　あんなズタボロだったのに……」
連れてく時は傷だらけだったので病院に連れて行こうと思っていたが、それは杞憂だったようだ。
「これは……なんかの金属片か？」
それだけではなく、知らぬ間に彼女の眠るソファに何かの金属片が幾つも転がっていた。
恐らく、傷口に食い込んでいた物が自然治癒の際に出てきたのではないかと推測する。

やはり彼女は俺の知る人間では無かった。
いや、そもそも人間ではないのかもしれない。
得体の知れない少女だが、俺からしてみれば２０年振りに再開した親友でもあるというのが奇妙に感じた。
こんな禍々しい尻尾生やした奴が人間って訳も無いか。
自己完結した俺はそのまま彼女が目を覚ますまで待つ事にした。
◇◆◇◆◇◆◇◆

イタイ……イタイ……ミンナ、ドコ。
ミンナ、死ンダ。
ミンナ、殺サレタ。
『逃ゲナサイ!!　主力ノアナタヲココデ死ナセル訳ニハイカナイノヨッ!!』
『ヲッ!!!!』
逃ゲナキャ。

ドコカ、遠クニ。

イタイ、死ニタクナイ。

助ケテ……キョウ。

残された者と捨てられた物

半ば廃墟となりかけている、このボロアパートのとある部屋。
そこで少女……いや、コードネーム『戦艦レ級』は目を覚ました。
見知らぬ部屋で目を覚ましたレ級は辺りを見回しそして、今に至るまでの経緯を思い出そうとする。

当時レ級の所属していた深海棲艦の艦隊。
彼女らはフィリピン海沖での作戦行動中、敵の陽動に引っ掛かり横須賀と佐世保鎮守府の精鋭部隊による奇襲攻撃を受けた。
相手は既にあのレ級が艦隊にいたのを察知していたのだろう。
横須賀と佐世保のほぼ全戦力による猛攻で精鋭揃いだったはずの深海棲艦達も物量によって圧死し、最後は旗艦の戦艦棲姫と空母ヲ級の決死の反撃によってまだ小破であったレ級のみを逃がす事に成功。
夜間戦闘且つ猛反撃で偵察機などは全て撃ち落とされていたのではっきりとは分からなかったが艦隊はレ級を残して全滅したと見られる。
本当は、レ級が旗艦を勤める筈だった。
しかしレ級の好戦的な性格と単独での非凡なる戦闘能力を鑑みて戦艦棲姫が旗艦を名乗り出たのだ。

レ級を逃がしたのも、彼女の命令だった。

◇◆◇◆◇◆◇◆

もう日も落ち切って辺りが暗くなり始めてきた頃、俺はバイトを終えて帰って来た。
昨日は少女が目を覚ますまでバイトを休んで家で待っていようとも考えたが、今の生活費からしてそんな事をしている余裕は無かっ

た。
元は大企業の工場で働いていたが、深海棲艦の侵攻による財政悪化に伴いリストラの標的となった。
しかし、俺はまだマシな方で酷い所では深海棲艦の空襲で会社や工場が物理的に吹っ飛ばされた所もある。
数年前にも大手の物流企業が倒産し、多くの社員が路頭に迷う羽目になった。
斯くして職を失った俺は社宅を追い出され、ボロアパートで暮らしながら飲食店でのバイトで乏しい生活費を稼いでいる。

自室に荷物を置き、風呂で汗を流そうと風呂場に向かうと異変に気付いた。
ソファに寝かせていた彼女の姿が無いのもそうだが、辺りの引き出しや押し入れなどに漁られた後があった。
それと、ベランダに続く窓が開いていた。
閉め切ったカーテンの先に人影が見える。
その傍らでは大きな尻尾が一緒に蠢いていた。
恐る恐る窓に近付き、ベランダの柵に腰掛けている影に話し掛ける。
「……め、目ぇ覚ましたのか――――」
その瞬間、凄まじい速さで尻尾が鞭のようにしなりながら動き出し、尻尾の先に付いていた獣の顔のような物が俺に向けられた。
口の中や頭の上には何やら火砲のようなものが見える。
昔暇潰しで読んでいた資料で見た深海棲艦の主砲とよく似ていた。
激しく動いた尻尾によってカーテンが吹っ飛び、その先にいる人影の正体が顕となる。
「……キ？」
「……！」
深海棲艦の主砲を突き付けられて硬直していても尚、彼女の姿を目に焼き付ける。
その姿を、その顔を、その表情を、そして紫色の瞳を見た時、俺は

確信した。

「やっぱり、お前……あの時の……」

「……ッ!!」

俺がそう呟くように言うと、彼女も気付いたのかあからさまな驚愕の表情を見せる。

「キョ…ウ？」

◇◆◇◆◇◆◇◆

「いだだだだだだだ!!!」

「キョウ……！　キョウ……!!」

俺……こと福嶋　享は現在進行形で少女に絞め殺されようとしている。

凄まじい腕力で体を締め付けられ、オマケにその上から尻尾で更に絞められている。

一歩間違えれば肋骨の1本や2本は逝くだろう。

「分かった！分かったから離せ!!」

彼女の拘束をなんとか解こうとするも、彼女は余計に腕に力を込めている。

そんなに再会が嬉しかったのだろうか。

数分後に漸く開放された俺は少女をソファに座らせ、テーブルを挟む形で向かい合った。

俺は彼女に対して聞きたい事が山ほどあるんだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆

彼女、レ級は俺の質問に対して至って冷静に、淡々と答えた。

曰く、レ級は深海棲艦の一種であると。

曰く、レ級以外にも人型の個体は複数存在すると。

曰く、２０年前に日本にやってきたのは侵攻前の敵情視察の為であったと。

確かに、今思い返してみればレ級はやたら港に行きたがったり、当時一番新しい日本地図を欲しがったりしていた。

そして最後にレ級はこう言った。

「艦娘モ、人間モ、全員殺ス。　ソシテ私達ノ大地を奪イ返ス。　同志達ハミンナソウ言ッテル」

レ級はどさくさに紛れてとんでもない爆弾発言をしていた。

２０年前の侵攻開始から今に至るまで不明だった深海棲艦の戦争目的をあっさりと喋ってしまったのだ。

これはとんでもない事を聞いてしまった、と冷や汗を流しているとレ級は唐突に俺の両頬に手を当てる。

その目は、慈愛に満ちていた。

「ダケド、安心シテ。　キョウハ私ガ守ッテアゲルカラ。　誰ニモ傷ツケサセナイシ、殺サセナイ」

「何故、そこまで……」

「ソンナノ、当タリ前」

たかだか３０日ちょっとの短い関わりしかなく、そしてそれも２０年も前だなんて人間の感覚で言えばそれはただの知り合いと変わりない。

名前を覚えている事すら奇跡と言える。

俺が頭の片隅に追いやり、もう忘れようとしていた事を彼女はまるで昨日の事のように鮮明に覚えているようだ。

「ダッテ、キョウハ私ノ大事ナ大事ナ……」

「トモダチ、ナンダカラ」

そう言いながら微笑むレ級に、俺はただ黙って苦笑いをするしかなかった。

歪んだ愛の逃避行

我々は、大きなミスを犯した。
あの時敵艦隊の戦力を見誤ったのはこの今の現状へと繋がってしまった。
何としてでも奴を仕留めなければならない。
国の為に、国民の為に、家族の為に。

ここは横須賀鎮守府。
嘗ての戦艦レ級討伐作戦に参加した例の精鋭部隊の拠点である。
軍事基地ではあるがそこに軍隊らしき物々しい雰囲気は無く、所属する艦娘達は皆ごく普通な日常を過ごしていた。
その鎮守府の中心にある執務室。
艦娘を指揮する提督の仕事部屋兼仮眠室として使われる。
日中の今執務室にいるのは、ここの艦隊の総指揮を担っている提督とその補佐を勤めている艦娘、『大淀』だった。
「捜査本部から報告がありました。　目標は最初に血痕が確認された堤防から何者かに回収され、今は千葉市にある古いアパートに潜んでいると見られます。　正確な位置はこちらに」
そう言って大淀は彼にタブレット端末を手渡す。
「成程な……それで、そのレ級を回収したというのは何者なんだ？」
「監視カメラの映像から身元の特定は出来ました。　福嶋　享、３２歳。　フリーターです。　しかし、深海棲艦やレ級との関係性は分かりません」
大淀の言葉を聞き、彼は唸る。
地上にまだ別の深海棲艦が潜んでいると考えていたが、協力者はなんと深海棲艦どころかただのそこら辺にいるフリーターの中年男。
一体レ級が何をもってしてこの人物の協力を得ることが出来たのだろうか。
「現在既に、Ｓ（特殊作戦群）がレ級捕獲と協力者の拘束の為に動き出しているとの事です」

「万が一の場合には、俺達も駆り出されるんだろうな……」
タブレットに表示された彼の経歴や住民票を見ながら顔写真に目を移し、思わず顔を顰める。
赤く染められた髪に、短く生え揃った顎髭。
肌は日焼けのせいか僅かに褐色肌になっている。
「いかにも学生時代やんちゃやってましたって感じの顔だなぁ……」
「提督は学生時代はあまり目立っていませんでしたからね。　友達もいませんでしたし、羨む気持ちも分からなくは――」
「やめろ！」
この凄惨なる戦争の中でも、彼らのように一時の平和を享受する者達もいた。
そこには確かに、まだ日常があったのだ。
◇◆◇◆◇◆◇◆

「何かが来る」
真夜中、一緒に寝ていた（無理矢理布団に入って来た）レ級が唐突にそう呟き俺を起こした。
深海棲艦の能力とやらだろうか。
俺を起こしたレ級は何やら警戒した素振りで窓の外を見ている。
その瞳に映っているのは、敵だ。
窓の外を確認すると、道路脇に複数台の装甲車が止まっている。
装甲車の後ろから出てきた何人もの重武装の兵士がアパートの階段を登っていく。
アパートは既に包囲されていた。
「おい、こりゃあヤバいんじゃねえのか……!?」
ドタドタと部屋の中にまで響いてくる足音を聴きながら俺は怯えた。
まさかレ級を狙って来たのか？
もしそうだとしたら俺はどうなる？
協力者として捕らえられ最悪の場合、外患誘致罪とかで即死刑になるのだろうか。
不安が募る中、窓から目を離したレ級は俺の方を見る。

「大丈夫、キョウハ私ガ守ルッテ言ッタデショ？」

瞬間、家の玄関が吹き飛ばされた。
外にはバッテリングラムを構えた兵士が立っていた。
その脇からゾロゾロと兵士が出てくる。
兵士達は俺に銃口を向け、引き金に指を掛けている。
他の兵士は土足で家に上がり込み、中を捜索しているようだ。
「跪け!!両手を上げて頭の後ろに置け!!」
言われた通りに跪き、両手を頭の後ろに置く。
気が付くと、レ級の姿が見えない。
一瞬逃げたのかと思ったが、直前のあの台詞を思い出すとそうではないような気がする。
「目標はいません！」
銃を構えていた兵士の1人が俺を床に押し付け、両手を結束バンドで拘束した。
「お前は深海棲艦と一緒にいたはずだ！　奴は何処にいる!?」
その凄まじい剣幕に気圧されながらも答える。
「しっ、知らねーよ!!　さっきまで部屋にいたんだけど……」
そう答えると、兵士は肩の無線機を繋ぎ何やら話し始めた。
「アルファリーダーからブラボー、チャーリー、目標は逃走した模様――」
先程まで銃口を向けていた兵士達が突然、何かによって吹き飛ばされた。
天井を突き破って来たのは、レ級だった。
「キョウヲ傷ツケル奴ハ許サナイ……!!」
その表情は、狂気と憤怒に満ちていた。
殺意を纏った眼光が兵士達を捉える。
「コンタク――」

アルファリーダーと名乗った兵士が銃を構えようとしたが、レ級が首根っこを掴んでいた兵士の1人を彼に向かって投げ飛ばした。
彼は飛んでくる部下を避ける事が出来ずに、2人揃って窓から放り出された。
この部屋は3階なので落ちればタダでは済まないだろう。
体制を立て直した兵士が発砲しようとして、そのままレ級の尻尾に頭を食いちぎられた。
放り投げられた頭がボールのように床を転がる。
そこから立て続けに尻尾の連装砲を他の兵士に向けて撃ち、砲弾は防弾チョッキを貫くどころかプレート諸共人体を真っ二つに引き裂いた。
あれ程統制の取れていた兵士は瞬く間に殲滅され、残されたのは原型の無い肉塊と床や壁、天井でさえも真っ赤に染め上げた鮮血だった。

「ココカラ逃ゲル！　掴マッテテ!!」
拘束されたままの俺を担ぎ、レ級は窓から飛び出した。
去り際にレ級は尻尾から砲弾ではない何かを射出する。

レ級が地面に着地したと同時に、俺の部屋が爆散した。

「俺の家がぁ!!?」
「ゴメンネ!!」
レ級は俺を抱えたまま走り出す。
両足だけでなく尻尾も駆使して人間ができるとは思えないような跳躍力で家の屋根から屋根へ飛び移っていく。
吹き飛んだ家がいい攪乱になったのか、追手が来る気配は無い。
市街地だから下手に戦力を動かせないのだろう。
◇◆◇◆◇◆◇◆

レ級が跳躍する度に感じる浮遊感と激しく揺れる景色に慣れてき

た頃、俺達はいつの間にか海岸に着いていた。
俺を下ろしたレ級は海の向こうを何やら見つめている。
何かを探しているようにも見えた。
「どうした？」
「……同志ガ向コウニイル。　コッチニ呼ビカケテキテル」
その言葉を聞いて、俺は思い出した。
確か深海棲艦はテレパシー的なコミュニケーション方法で高い連携能力を維持していると聞いた事がある。
レ級にも勿論、それはある筈だ。
という事は彼女が言う同志とは、深海棲艦がこっちに来ているという事だ。
「おい大丈夫なのか？　人間の俺殺されない？」
「サッキ話ヲツケタ。　目的ハ私ダケミタイダッタケドキョウモ一緒ニ連レテッテイイミタイ！」
レ級は心底嬉しそうな表情ではしゃいでいる。
ここだけを見てればただの純新無垢な少女だ。
しかし、彼女はついさっき１０人以上の大人の兵士を殺戮している。

「ヤッタネ！　キョウ！」
水平線に黒い影がポツポツと、次第に近付いて来ていた。

新天地

今俺がいるのは、横須賀から沖合約２００ｋｍ地点の海上。
無事追撃を振り切る事に成功した俺達は深海棲艦の本隊と合流し、安全な場所に連れて行かれている訳なのだが。

「恥ずかし過ぎて死にそうだ……」
大の男が身長頭１つ分小さい少女に抱き抱えられながら逃げるというなんともシュールな光景が出来上がっていた。
「恥ズカシガッテルキョウモ可愛イ……」
こうやってレ級の慈愛の眼差しを向けられる度に余計に危ない感じがしてくる。
俺は別にそのような趣味は無い。
はずだ。
「レ級、アマリ遊ビスギルナヨ。　人間、オ前モダ。　マダマダ目的地ハ遠イノダカラ我慢シロ」
「こんな状況で言われてもな……」
「キョウ！　キョオオウ！」
「うわぁ頬擦りすんな!!」
まるでぬいぐるみのように弄ばれる俺を他所に目の前の彼女達は先を行き続ける。
陣形的に一番先頭にいるのが隊長……いや、旗艦のようだ。
セーラー服を纏い、下半身はパンツなのかブルマなのかよく分からん服装をしていて色々と股間に非常に宜しくない格好だ。
それと左肩のやたら自己主張の激しい肩パッドが気になる。
あれも何かしらの装備なのだろうか。
「……」
セーラー服姿のグラドルみたいな深海棲艦を眺めていると、何やら

無表情のレ級がこちらを見下ろしていた。
「ど、どうした――」

「駄目ダヨ」
俺の言葉を遮り、恐ろしさのあまり底冷えする程にトーンの低い声で呟くように言うと凄まじい力で俺を抱き締め始めた。
「な、何を――」
「見チャ、駄目」
自分に向けられているレ級の視線が恐ろしくて、上を向くことが出来ない。
今彼女と目を合わせてはいけないような気がする。
レ級の胸に顔を埋もれさせながら、取り敢えず余計な行動は謹んでおくことにした。
「分カッテルヨ、キョウモ男ノ子ダモンネ。　モウ、見タカッタラ言ッテクレレバ私ガ見セテアゲルノニ……」
胸に顔を埋めているとどうやらレ級も機嫌を取り戻したようで、上機嫌になりながら相変わらず俺を抱き締めている。
というか、今に至るまで殆ど眠れていないので眠気が今になって襲って来た。
レ級の胸の中の安心感がトリガーとなったのだろう。
それにレ級も気付いたようで、俺が眠りやすいように元のお姫様抱っこに戻してくれた。
「眠イノ？　イイヨ、眠ッテテ。　着イタラ起コシテアゲルカラネ」
「あぁ、そう……じゃあ…頼むわ……」
潮風に当たりながら、俺はそのまま眠りに落ちた。
◇◆◇◆◇◆◇◆

一方で、日本国内ではレ級の討伐作戦の失敗により大騒ぎになっていた。
横須賀鎮守府の提督、宮嶋　遼平は追撃艦隊の出撃も考えたが太平

洋沖では天候が悪化し始めていると報告があり、やむを得ず追撃は諦めた。

その次の日、遼平は鎮守府の外庭である艦娘と話していた。

「すまなかったな、折角のお前の出番を潰してしまって」

遼平が頭を下げようとするのを、彼女は手で制した。

「構いません。　チャンスがある限り、私は幾らでも待ちます。　しかし、奴を見つけた時は必ず私を出撃させて下さい」

彼女の瞳には、強い決意が宿っていた。

大切な物を奪われ、そして尚も戦おうとする意志の強さに遼平は改めて感嘆した。

「奴は、私が仕留めます」

「そうだな、レ級はお前の姉の仇だからな……」

「武蔵」

それは、復讐に燃え狂った者の目ではない。

彼女は復讐と仇討ちの分別がついていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆

レ級の腕の中で眠ってからどれ程経っただろうか。

目を覚ました時、俺は薄暗い縦長の部屋のような空間でベッドに寝かされていた。

ベッドで寝たまま、周囲の状況をよく確認してみるとどうやらここはコンテナを改造した家のようだ。

「ここは……ん？」

掛け布団を退かし、起き上がろうとすると何かに動きを阻まれる。

体に何かが絡まってる感じがする。

恐る恐る自分の左隣に目をやる。

左隣には、俺の体に抱き着いたまま寝ているレ級の姿があった。

そういえばこんな光景はついこの間にもあったな、と俺は思った。
しかしこのままでは動けないので、レ級を起こそうと試みる。
「おい、起きろ」
「ン…ウゥ……」
体を揺さぶったり、軽く頬を叩いてもレ級が起きる気配は無い。
それどころか余計にレ級は俺の体に絡み付き、傍から見ると色々と不味い絵面になってしまった。
そろそろ無理矢理引き剥がしてやろうかと考え始めた頃、唐突に足音が聞こえて来た。
逆光で誰かはよく分からないが、人影がコンテナの中に入って来た。
不味い、非常に不味い。
「ちょ、ちょっとストップ!!」

静止を呼び掛けるが、人影はなんの躊躇も無くベッドに近付いてきた。
言葉が通じないのか、それとも分かってて応じないのか。
「離れろぉぉ……!!」
俺は必死にレ級を引っぺがそうとする。
「キヒヒ……キョウ……好キィ……モット……」
レ級はにへら顔で寝言を呟きながら木にへばりついた甲虫のように凄まじい力で体にしがみついている。
人の筋力では到底動かせそうもない。
ジタバタしている内にもう人影はすぐ目の前に来ていた。

そして、遂に人影と目が合ってしまった。
それもレ級に乗っかられながら体を擦り付けられてる状態で
「あっ……いや!! これは! 違うんだよ! 決してそういう意図があってやったとかじゃねえからな!」
俺はレ級に抱き着かれながらも必死に弁解をする。

目の前にいる人影、少女は疑問の表情を浮かべながら首を傾げている。

「ヲッ？」

暗くてよく見えないが、彼女は何故か頭にとても大きく禍々しい見た目の帽子を被っていた。

プリンセス・オブ・ジャンク

美少女に乗っかられるおっさん。
それを他人から見られれば人生の終わりを感じるがしかし、結論だけで言えば助かった。
何故かと言えば……

「ヨーショショショー！」
「ヲー！ヲッヲッ！　ヲーヲー！」
彼女、空母ヲ級がレ級を超える程の超ド天然っ子だったからだ。
レ級にわしゃわしゃと頭を撫でられながら（頭に付いていた禍々しい物体は着脱可能だった）嬉しそうに鳴き声を上げるヲ級。
「可愛イデショ！　マサカ生キテタナンテ！」
「ヲ！」
その小動物的可愛らしさについほっこりしてしまったが、何とか本題に持っていく。
「えっと、それで？　結局ここは何処なんだ？」
「ココハ、ルソン島トカイウ島ラシイヨ」
「ルソン島の何処だよ……」
取り敢えず、フィリピンにまで連れてこられた事は分かった。
実際、フィリピン及び東南アジア諸国の殆どは深海棲艦の侵攻で陥落しているので一番近い拠点として選ばれたのだろう。
そのお陰で中国やインドなどの西アジア諸国はおぞましい数の難民で苦労しているそうだ。
「せめて地図でもありゃあな」
「分カッタ！　多分アノ同志ナラ持ッテルト思ウカラ貰ッテクル！」
「ヲッヲッ！」
意気込む彼女らを手で制する。
「待て、俺も行く。　周りがどうなってるかも知りたいしな」

「ジャア早ク行コウ！　」
「ちょちょっ!!」
レ級に引っ張られたまま俺はコンテナハウスの外へと連れ出された。
日差しが痛い程に眩しい。
ここはどうやら港町のようだ。
それもかなり大きい。
港を見渡していると、視界に写ったその物体に俺は驚愕する。
「ありゃあ、コンテナ船じゃねえか！　あっちにはタンカーかよ！」
港だった所には、複数の大型船舶が停泊していた。
深海棲艦が物資確保の為に船ごと奪ったのだろう。
圧巻の光景に呆然としていると、レ級が1隻のコンテナ船を指さす。
「アソコニイル。　集積地棲姫ッテ呼バレテル」
聞き慣れない名前だが、棲姫という単語に強く反応する。
深海棲艦についての事はだいたいレ級から聞いていた。
「待てよ、棲姫って事は姫級か！　深海棲艦でもトップクラスの連中かよ！」
レ級はその言葉に肯定する。
ヲ級は「ヲッ」としか喋らないが肯定してはいるのだろう。
姫級……深海棲艦の中でも鬼級を超える最上級の戦闘能力と指揮権を持つと言われている。
その姫級にも様々な種類がいるそうだが、レ級からの話しだけでは正確な情報は掴めなかった。
俺は姫級に会うことに対して不安を覚えていたが、寧ろこれは新しい事を知る機会なのではないかと考えることにした。
深海棲艦と行動を共にする以上、せめて名前ぐらいは覚えておいた方が損はしないだろう。
◇◆◇◆◇◆◇◆

「デート、キョウトノデートー！」
繋いだ手をブンブン振り回しながら上機嫌に歩くレ級と共に向かったのは港に雑に停められたコンテナ船。
どうやらここに集積地棲姫とやらがいるらしい。
話によればこの拠点の全ての物資を統括しているそうだ。
軍隊で言う主計科のようなものだろうか。
港にたどり着いて、実際に接近してみるとやはりコンテナ船という物はかなり大きい。
見上げるほどのサイズに圧倒されながら、入口を探すと甲板から垂れ下がった縄ばしごを見つけた。
「面倒臭いが、これで行くか」
「私ニ任セテ！」
「は？　ちょっ――――」
そう言ってレ級は俺をいきなり抱き抱えたかと思うと、跳躍した。
縄ばしごを数十段飛ばしした俺達は、あっという間に甲板に辿り着いてしまった。
「スゴイデショ！　困ッタライツデモ私ヲ頼ッテネ！」

「ヲー……」
因みに身体能力がそこまで高くないヲ級は置いてけぼりである。

甲板に辿り着いた俺達は集積地棲姫がいると言う船橋を目指して歩く。
このコンテナ船はかなりの年季が入っているのか、全体的に錆びている。
錆だらけの梯子を登っていると、表面がめくれ上がった所に指が触れてしまい切ってしまった。
「あだっ！」

「ドウシタノ!?　キョウ!!」
「ヲッ!?」
痛みに思わず呻くと、いきなりレ級が物凄い形相で近付いてきた。
怪我を心配しての事だろうが、その時俺は一瞬捕食されるのではと思ってしまった。
「指切っただけだ、気にすんな……っておい！何すんだ」
レ級が腕を掴み、血が滴り落ちる人差し指を数秒見つめるとそれを咥え出したのだ。
まるで吸血鬼のように傷口にしゃぶり付き、血を啜っている。
「チゥ……レロォ……ハァ…チュゥゥ……チュパッ」
傷口に長い舌を這わせながら、時折指を丸ごと咥えて指全体を舐め回す。
一度口を離した時に聞こえて来る吐息がこれまた艶かしい。
何より中学生かそこらの体格の美少女がそんな事をやっているという光景自体が色々とヤバいのだ。
劣情を煽るような吸い方に少し股間が反応仕掛けたが、なんとか根性で萎えさせた。
「マジかよ……飲んでやがる」
「ヲー」
相変わらずヲ級は何が起きているのかよく分かってないようだ。

一頻り血を啜り続けた後、血が止まるとレ級はようやく口を離した。
「フゥ……コレカラモ怪我シタ時ハ言ッテネ」
「俺その内干からびるんじゃないの」
そんなやり取りをしながら上へ登ること数分。
遂に船橋へ辿り着いた。
取り敢えず中へと続く扉をノックしてみる。
しかし反応は無い。
もう少し強めに叩いても反応は帰って来ない。

「いないのか?」
反応がいつまで経っても返ってこないので、恐る恐る扉を開けてみた。
鍵は開いていたのですんなり中に入る事が出来たが扉を開けて真っ先に視界に入って来たのは大量のガラクタの山だった。
「なんだこりゃあ」
「集積地棲姫ッテガラクタ集メルノガ趣味ナンダヨ」
様々なガラクタが所狭しと置かれている。
洗濯機、電子レンジ、パソコン、エアコン、テレビ等、それに大量のスマートフォンも山積みにされていた。
どんな物が置かれているのか、漁ってみようと手を伸ばした時だった。

「私ノコレクションニ触ルナ!!」
その怒鳴り声のする方に振り向くと、そこには眼鏡を掛けヘッドホンを付けた白髪の少女が立っていた。
何故か両手には何かの電子基板とはんだごてを持っていた。

深海の都

レ級に舐め回されて唾液でベチョベチョの指が乾いてきた頃、俺達は遂に彼女と出会った。
彼女の名は集積地棲姫。
盛り上がった白髪にヘッドホンと眼鏡が特徴的だ。
集積地棲姫はやはりこのルソン島一帯の物資を統括しているらしい。
地図を見せてもらって分かったことだが、ここはフィリピンの首都であるマニラだった。
道理で街の規模が大きかった訳だ、と俺は納得した。
あのコンテナハウスは俺の家として使う為にレ級とヲ級が2人で作ってくれたとの事だ。
感謝の言葉を掛けながら頭を撫でてやると、2人は気持ち良さそうに鳴く。
しかし、俺は何故折角マニラの大都市があるのにそこに住まわせてくれないのかと聞いた。
マニラは中小国の首都とはいえかなり大きな街だ。
人類より遥かに数の少ない深海棲艦では手に余るのではないかと考えたのだ。
俺の問に対して、集積地棲姫曰く。
「アノ街ニハ多クノ同志ガ独自ノテリトリーヲ築イテイル。　ダカラ既ニオ前ラノ取リ付ク島ハ無イゾ」
「テリトリー？　1人の深海棲艦が広い範囲を占有してるって事か？」
「正確ニハ艦隊ダ。　各艦隊ガ皆ソレゾレノ領地ヲ持ッテイル。　ドノ艦隊ニモ属サナイオ前ラガ住メナイノモ当然ダ」
「ソウダッタンダー」
レ級は船橋の冷蔵庫から勝手に取り出したジュースを飲んでいる。
取り敢えず俺は情報提供をしてくれた集積地棲姫に感謝の言葉を述べ、この後どうすればいいかを聞いた。

「好キニシロ。　私ハハナカラ人間ニ興味ナド無イ」
集積地棲姫はそう言うと立ち上がって俺達を一瞥すると再び薄暗い船橋の奥へと戻って行った。
「ソウダ人間、モシ困ッタコトガアレバ戦艦タ級トイウ奴ヲ尋ネルトイイ。　レ級ノ救出ニ来タ艦隊ノ旗艦ダ」
最後にそれだけ言い残して。

◇◆◇◆◇◆◇◆

コンテナ船から降りた先にある旧マニラへ向かった時、俺はその光景に呆然とした。
嘗て栄えていたはずの大都市の面影は無く、そこにあるのは砲撃と爆撃で崩れ落ちたビルや家屋の残骸と、乗り捨てられたまま朽ちた車などばかりが視界を埋めつくしていた。
「……こんな所に住むのは御免だな」
「ネー見テ見テ!!」
レ級が瓦礫の下から何か引っ張り出してきたので間近で確認してみると、それは誰のかも分からぬ白骨死体の腕だった。
「うぉっ!?　なんてもん持ってきてんだお前！　さっさと戻してこい！」
しかしどうやらレ級が興味を示しているのは腕そのものではないようだ。
薬指から外したそれを、レ級はまじまじと見つめる。
「結婚指輪がどうかしたのか？」
「ケッコンユビワッテ言ウンダ。　前ニ殺シテヤッタ戦艦ノ艦娘ガコンナノ付ケテタ」
どうやら結婚の意味も知らないレ級は不思議そうにその指輪を数秒見つめるとやがて飽きたのか後ろに放り捨てた。
まぁ、ロクな教育すら受けていないレ級ならば致し方無いだろう。
一方でヲ級はその頃野良猫と戯れていた。

「ニャッニャッ」
「ヲッヲッ！」
「ニャー」
「ヲー」
◇◆◇◆◇◆◇◆

マニラ北西部の嘗て街だった場所。
栄華の残骸が横たえるこの場所は、深海棲艦の為の港湾施設と成り果てていた。
いわば鎮守府に近い施設であった。
その中の簡易テントの中で４人の深海棲艦がテーブルとそこに広げられた世界地図を取り囲んでいる。
一人は享とも会ったことのある例のグラドル深海棲艦、戦艦タ級。重巡リ級、軽巡棲鬼、駆逐水鬼。
「今週カラ哨戒艦隊ヲ増ヤス事ニナッタ」
「ナンダ、エラク急ナ話ダナ」
哨戒の増員の連絡をしたタ級に半ば野次を飛ばすように言い放ったのは椅子でふんぞり返ったリ級だった。
彼女はこの泊地でもそれなりの古参で他の海域でもそれなりの実戦経験を持つ、現場肌の強い叩き上げの深海棲艦である。
「近頃、我ガ潜水部隊ト偵察機ガ妙ナ兆候ヲ捉エタ」
そう言いながらタ級は地図の複数の部分を指し示す。
「台湾ノ『左営港』、パプアニューギニアノ『ポートモレスビー』、日本ノ『佐世保』、ソシテマダガスカルノ『トゥアマシナ』」
指し示した場所はどれも鎮守府が置かれている場所であり、東南アジア戦での主要な拠点でもある。
「ココガドウカシタノ？」
地図をまじまじと見つめながら駆逐水鬼は首を傾げた。
「コレラノ港ニテ我々ハ敵大部隊ノ移動ヲ感知シタ」
「ジャア、考エラレル事ハ一ツダネ」

腕を組みながら軽巡棲鬼が余裕のある表情でも答える。

「アア、近々敵ノ大規模ナ攻勢ガ始マルゾ」

キックスタート

佐世保鎮守府で新たな動きが起きていた。
いや、それは佐世保だけではない。
深海棲艦東南アジア基地を包囲する形で置かれた全ての鎮守府で次なる作戦に向けた艦隊の大移動が起きていたのだ。
その規模は日本、アメリカ、ロシア、ＥＵ、中国、韓国の６ヶ国軍の艦隊。
本作戦では地上攻撃用に艦娘以外の現行の艦船の殆どが引っ張りだされている。
「まさに圧巻の光景だな……」
「全世界が本気になっているという事です、この作戦に」
佐世保に集結した戦力を見ているのは横須賀から自分の艦隊の指揮のために連れてこられた遼平とその秘書艦の大淀であった。
数多くの護衛艦、巡洋艦、果てには原子力空母までもがここに停泊していた。
そして港には世界各国からやってきた１００名余りの艦娘が集結している。
今までで類を見ないレベルの戦力の規模である。
しかもこれ程の戦力が佐世保以外にも台湾の左営港やマダガスカルのトゥアマシナ、パプアニューギニアのポートモレスビーに存在しているのだ。
「まさか、日本の港で遼寧や世宗大王を見れる日が来るなんてなぁ」
「もうこの港に国境は存在しないという事だよ。　宮嶋　遼平」
「あんたは……」
そこにいたのは韓国海軍の提督と共に歩いてこちらにやってくる佐世保鎮守府の提督、仲本　徹であった。
「この方がお前にもぜひお目にかかりたいとの事だ」
そう言うと韓国海軍の提督がこちらに歩み寄って来る。
「私は韓国海軍第２艦隊を指揮している金　勝奐と申します。　フィリピン海での貴方のご活躍はよく知っております。　我が軍でも有

名人ですよ貴方は」
そう日本語で話しながら勝奥は握手を求めて来たので彼はそれに応じて手を握る。
表情からして本当に嬉しそうだ。
「日本語が随分とお達者ですね」
「ええ、学生の頃は日本で過ごした事もありますから。　多少は使いこなせますよ」
「成程」
勝奥と談笑しながら遼平は複雑な心境に陥っていた。
深海棲艦は確かに、人類に突如として牙を剥き多くの軍人民間人問わずの人々を殺戮した。
その被害の大きさは現状の世界情勢を見れば一目瞭然だ。
東南アジアが壊滅したことにより西アジアは深海棲艦の攻撃と同時に押し寄せて来る大量の難民に苦しめられる事となり、ヨーロッパなどでは深刻な食糧危機が起き、暴動やそれによる死傷者のニュースが絶えない。
唯一マシなのが艦娘の原点である東アジアと世界トップの戦力を誇るアメリカのみであった。
こんな甚大な被害をもたらした深海棲艦だが、これが逆にある事を起こした。
皮肉にも深海棲艦の攻撃は今まで対立していた国同士に団結の意思を起こさせ、世界レベルの協調をもたらしたのだ。
本作戦、『エスペランサ作戦』がその証である。
この戦いに、最早国境は存在しなかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆

一方で、俺達はレ級達と共に街の中を歩いていた。
レ級は俺の右腕に抱きつき、ヲ級もそれに便乗して今は両手が塞が

れている。
「キヒヒ……」
「ヲー」
荒廃した街を歩く俺達の姿は、さぞかしシュールな光景だろう。
歩く事かれこれ1時間位は経ったが、未だに人の気配は無い。
集積地棲姫からは深海棲艦がここにもいると聞いているが周りには瓦礫や残骸だけがあるのみでやはり人はいない。
「ホントにいんのかこんな荒れ果てた場所に」
「イルガ？」
「おわっ!?」
突然聞こえて来た声に振り向くと見慣れた顔の深海棲艦がいた。
あのグラドル肩パッド深海棲艦だった。